

「ぶっはあー……ふう……」

深夜誰もいなくなつた校内で月明かりが差し込む暗い室内プールで一人で競泳水着を着て私は泳いでいた、この大きなプールを独り占めできるのは鍵当番の時だけ、この時間がすごく好きで鍵当番の度堪能している。

私は、今年新しく新任教師かつ水泳部の顧問としてこの私立宮津学園で働き始めた。

ここは、お金持ちの子達に通う高校で、文武両道をもっとうに勉強しやすい環境、最新鋭の設備を整えたスポーツ施設がある学校だ、生徒たちもものすごく勉強熱心で教えがいがあり、同僚の先生方も良い人が多い、だが一点だけ悩みの種がある。

「せーんせい、また一人で残つてプールを独り占めですか」

私以外誰も居ないはずだったがプールサイドに制服を綺麗に着こなす男子生徒が現れる

「宮津、葵君……」

彼は私の受け持つクラスの生徒で、宮津学園長の息子、成績優秀スポーツ万能な優等生なのだが、どうにもこうにも私がお気に入りらしく何かと話しかけてくるのだ、最初は気にかけてくれて嬉しいと思つていたのだが、最近そうでは無い事がわかった。

「先生、僕と一緒に泳ぎませんか？せつかくこんな時間まで学校に残っていたんですし」

「いやよ、もう今日はもう帰るわ、貴方も早く下校しなさい」

私は、彼に目線を合わせないようにプールサイドへ足をかけて上がる、楽しい時間を邪魔されて、すこし腹は立つがこの子相手は、できるだけスルーする事が最前策だと最近分かった。

「所で先生、前の話は考えてくれた？」

「……何の話かしら？」

「僕と付き合う話ですよ！あれから何度も言ってるじゃないですか、」

これが私の悩みの種だ、彼はいつも私一人になる度に告白してからかってくる、そして毎回断っているのにも関わらずめげずに言ってくる正直困っていた、彼は学園長の息子故強く言いすぎる事も出来ず、さらに彼は学園の人気者で他の先生からも一目置かれているため、相談できずにたじたじだった。

「ごめんなさいね、私はあなたとは付き合えないわ、だからもう諦めてくれるかしら？」

「そんな事言わないでさ、一回だけで良いんですよ、俺の彼女になっってください！」  
彼は未成年、さらに自分の受け持つ生徒、付き合う付き合い合わない以前の問題だ。

「無理なものは無理です！しつこい男は嫌われますよ！！」

「ッ……」

つい声を荒げてしまう、しまったと思えば彼の表情を見ると少し悲しげな顔をしていた、そ

の顔を見て罪悪感に駆られる、

「わかったら、早く家に帰りなさい」

私は冷たく言い放ち、タオルを手に取りプールから女子更衣室へ向かった、だが私は、気づかなかった彼の目の奥底に宿る欲望に…

更衣室でガチャと自分の衣服がはいたロッカーを開けて

「ふう、どうしたものか……」

ため息混じりに呟く

「きゃっ!?!」

その時突然後ろから何者かに抱きつかれる

私は思わず驚きの声を上げてしまった、すると背後から聞き覚えのある声で囁かれる

「先生さっきのはひどいなあ……」

ゾクッと背筋が凍るような感覚に襲われる、だがそれは恐怖ではなく快感に近いものだった。

「あ、葵くん？何をしてるのかしら？ここは女子更衣だよ……？」

動揺を隠そうと冷静に問いただすが身体中震えていて説得力がない。

「先生が悪いんだよ、あんな冷たい態度取るんだもん、」

「えっ?」

「俺だって傷つくんだよ、それに先生って可愛いよね、おっぱい大きいスタイルいいしさ、もしかして自覚ない?」

そういうと彼は私を抱きかかえて更衣室のベンチに横たわらせてきた、葵君は私に覆い被さるように、私の両手を上にまとも上げて片手で固定される

「ちよ、ちよつとやめて!離しなさい!」

「嫌だね、言ったでしょ、僕は先生の事好きなんだって」

「やめ、んむっ!?!」

彼は強引にキスをして私の口内を犯してくる

「ぶはぁ、僕と先生の初めてのキスだね♪」

「こ、こんな事許されないわよ!親御さんに報告しますからね!あと警察に通報するわよ!」  
私は必死に抵抗しながら言う。彼は不敵な笑みを浮かべた

「そんな事言って良いのかな?♪先生今の状況わかってる?僕未成年かつ学校の人気者、さらにここの学園長の一人息子だよ?、だれがただの新人教師言う事とを信用してもらえる

かな？」

「そ、それは……」

確かにそうだ、彼が私を襲ったと言えば誰も信じないだろう、それ以前に彼に逆らえる力もない、

「そ、れ、に、先生も期待してるんじゃないこの状況」

彼はそう言いながらも片方の手で、私の競泳水着をずらし胸があらわになる

「ッ?!」

「こんなに乳首おつたてて、期待してるとしか思えないな、僕、」

「ち、違いわ！これは……えっと……」

言葉に詰まりながら恥ずかしさと悔しさから涙目になりながらも反抗するが無駄だった。

「嘘つきにはお仕置きが必要だよね？」

「ひゃうっ♡」

彼は指先で乳首をつまみ弄ぶ

「ほら先生♪感じてこんなになんて固くなってるよ？やっぱり期待してたんじゃない♪」

「違、うう……」

さらに彼はニヤニヤとしながら片手で遊びつつ、もう一つの乳首を口に含む

「はむっちゅば、じゅる」

「だめえ……吸わないで……」

彼の舌使いはとても上手く、私の理性はどんどん削られ溶けていく

「じゅる、乳首だけでイキそうだね、はむっ」

「いや……イク、イッちゃやう♡！ああ！！」

今度は甘噛みして、ピクピクと身体が痙攣し絶頂を迎えてしまった、それを見ていた彼はクスリと笑い、またもや耳元で囁いてくる

「先生♪腰動いてるよ♪乳首だけでイッタの気持ちよかった？」

「もう、やめてえ……こんな事……」

私は恥ずかしさで顔を真っ赤にして俯く

「ふーん、まだ理性あるんだ……次は下の方でイカせてあげるね♪」

「きゅっ」

彼は私の手の拘束をやめた、その一瞬で逃げようとしたが、彼は素早く私の両足を開脚状態で固定されて身動きが取りづらい体制になってしまった、

「逃げようとしてもダメだよ先生、僕本気だから」

「ひっ……」